

記憶の現像術

記憶の現像術 —写真を用いた光記憶の空間化手法—

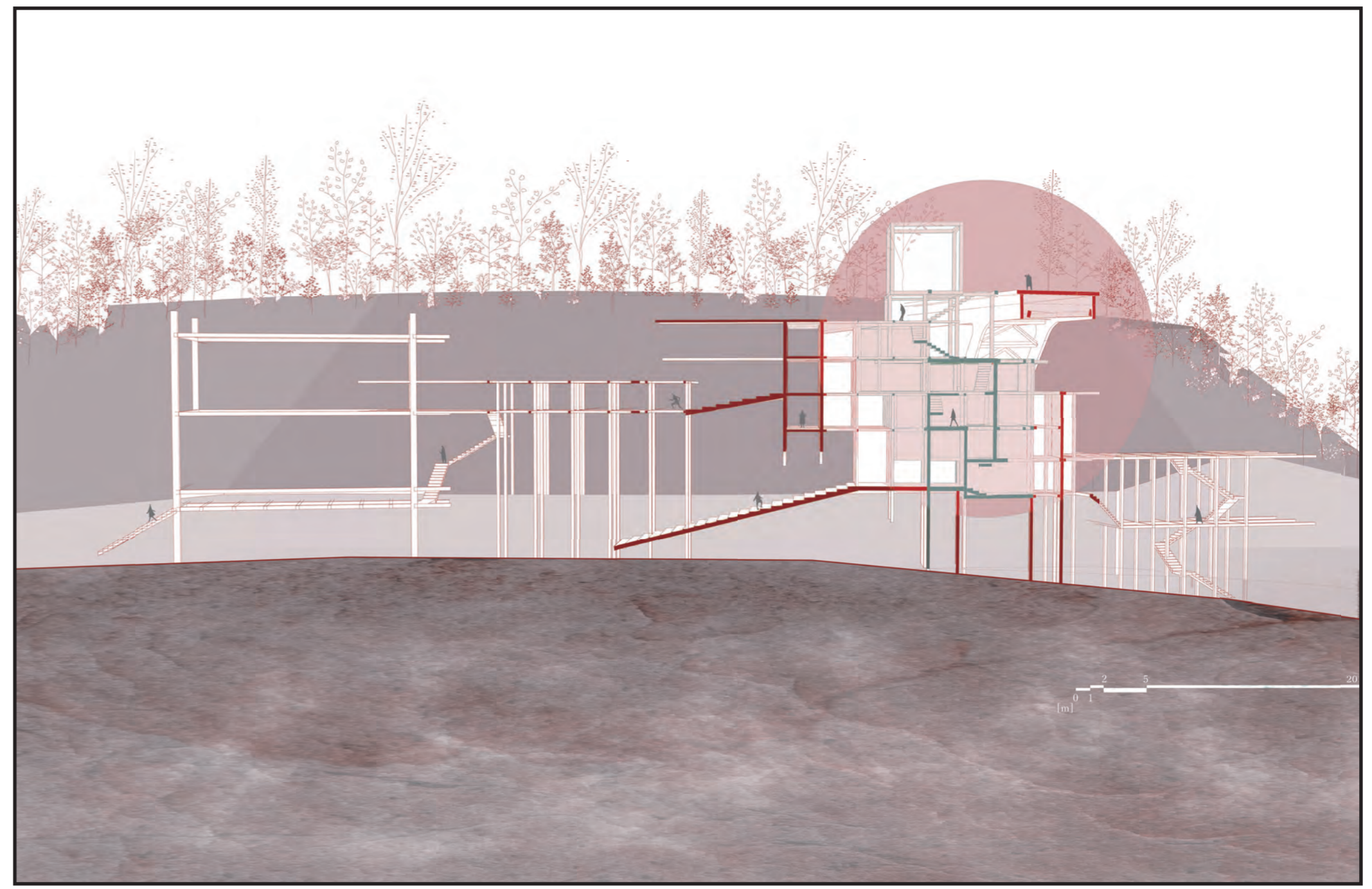


初めて訪れた場所なのに、どこか懐かしいのはなぜだろう。そんな素朴な問いから本研究は始まる。人は空間を見ると、実空間に自らの記憶から生じる空間のアイデアを重ね描いている。本研究は、その像を写真上に表象し、建築空間へと現像する思考実験である。記憶が、まさに遺伝子となって建築という形をつくる。

今から100年前の明治後期、奈良と京都南部の府県境に「大仏鉄道」と呼ばれる路線があった。大仏鉄道は、当時の私鉄「関西鉄道」大仏線の愛称。1898～1907年のわずか9年間の稼働であったが、現在のJR加茂駅(京都府木津川市)～奈良駅(奈良市)間9.9キロを、英国製の真っ赤な蒸気機関車が駆け抜けた。現在では線路の原形はとどめておらず大部分が道路へと更新されている。付いた異名は「幻の鉄道」。隧道(ずいどう)や橋台などの遺構が潜むようなたたずまいで点々と残る。わずか9年間の記憶が夢げに残るこの敷地を、今回の思考実験の敷地として設定した。

廃線跡の中でも目を引いたのが、「黒髪山トンネル跡地」である。山を力強く貫いた全長100mほどのトンネルの姿はもうなく、切り開かれた山の合間を道路が走り、地上20mの位置に「証」としての意図か、歩道橋が架けられている。奈良県で最も高い位置に架かるその歩道橋と、谷あいの道路の光景は異様なものに映る。

本思考実験のツールとして用いる写真というものの性質、つまり極論を言えば「光を映す」ものである写真にとって、多様な光の体験が起こるトンネルは相性が良い。そこで敷地をこの「黒髪山トンネル跡地」に、さらに扱う記憶も「光の記憶」に絞ることとした。



study: [pic.an]-[archi.an]

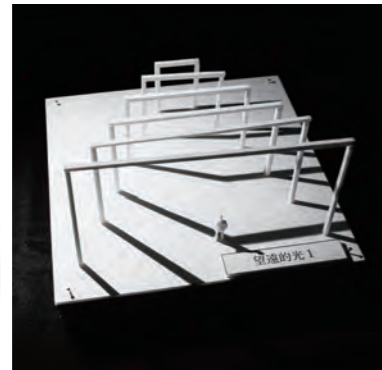
—写真上への表象と、その形態化スタディー—



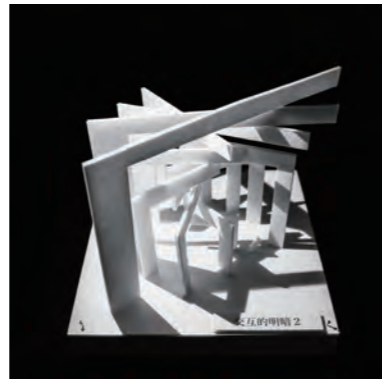
本スタディでは光の記憶を6つ扱うこととした。
a1.「望遠的光」 a2.「交互的明暗」 a3.「白とび」
a4.「反射光の錯綜」 a5.「明順応」 a6.「黒つぶれ」
の6つである。



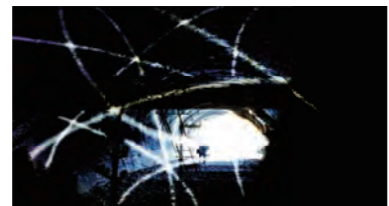
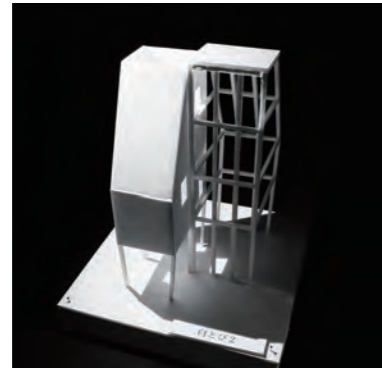
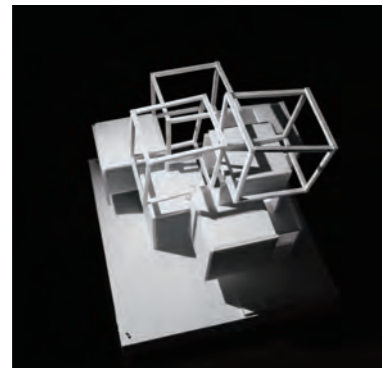
a1. 望遠的光



a2. 交互的明暗



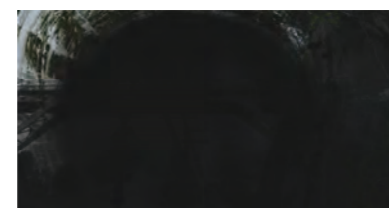
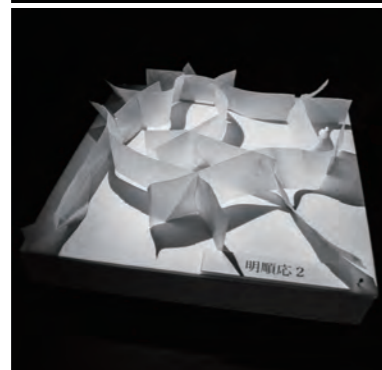
a3. 白とび



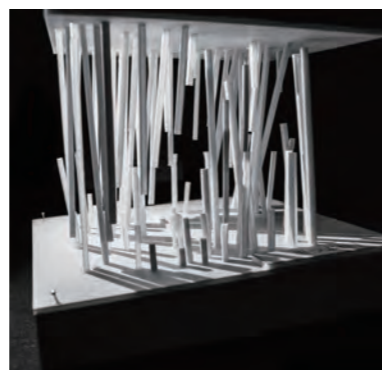
a4. 反射光の錯綜



a5. 明順応



a6. 黒つぶれ



design process

—光記憶の空間化—

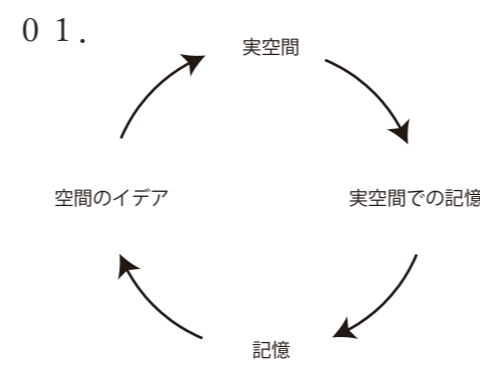
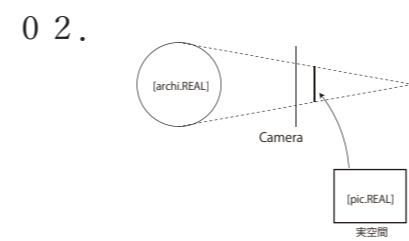


fig.1 記憶と空間のサイクル

観測者にはこれまでの記憶があり、そこから空間のアイデアが形成される。実空間上でそれは想起され、実空間での記憶がまた自分の記憶を上書きしていく。



実空間([archi.REAL])をレンズを通してありのままに捉えた像を[pic.REAL]とすると、それに対し観測者Aは実空間に自らの空間のアイデアを重ね見た像([pic.A]とする)を捉える。また一方で観測者Bは[pic.A]とは異なる[pic.B]を捉える。

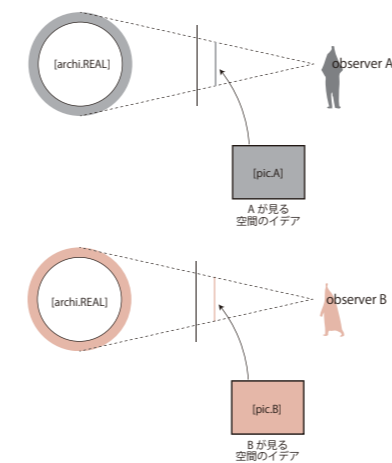


fig.2 観測者による実空間の見え方の違い

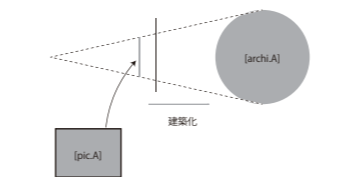
03.

① [pic.A]を描く



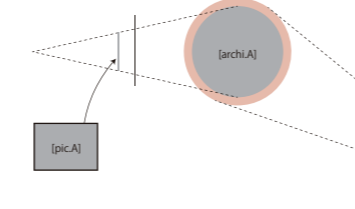
観測者Bに[pic.A]を見せることはできないだろうか、それも建築をとおして。

② [pic.A]を実際に建築化し、[archi.A]とする



まず[pic.A]を写真上に描く。この際文字通り1枚のピクチャに描くことは不可能であり、複数枚のピクチャ([pic.a1],[pic.a2],..., [pic.an]とする)に描き、それらの統合が[pic.A]に近いものになると考えた。

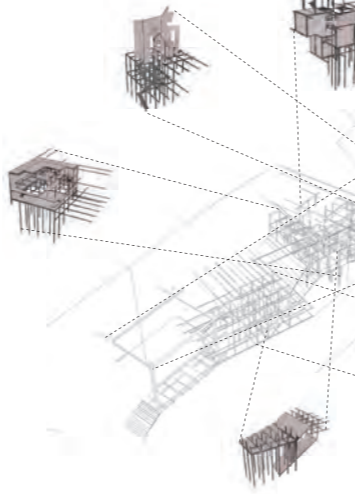
③ [archi.A]を包含する[pic.B]ができる



次にそれらのピクチャを形態化したもの([archi.a1],[archi.a2],..., [archi.an]とする)を創造する。その統合を[archi.A]とするならば、観測者Bが[archi.A]をることのできる[pic.B]には、[pic.A]が含まれているのではないだろうか。

fig.3 Aが見る空間のアイデアをBに共有する原理

04.



6つの[archi.an]を敷地における適切な視点場に配置する。

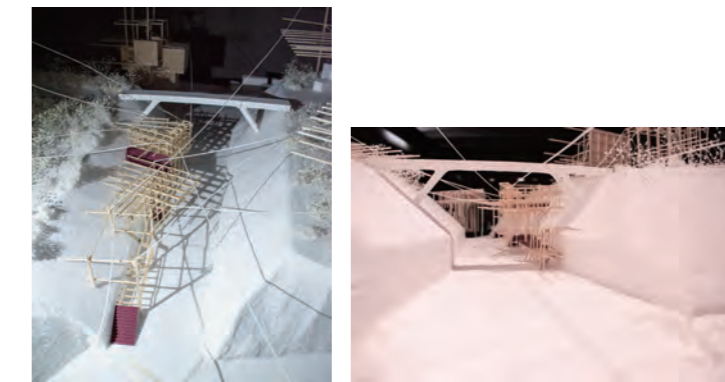
設置に伴い必要な構造物を、既存の歩道橋を拡張する遊歩道空間として常設する。地上と歩道橋のレベル差20mを移動する遊歩道であり、以下ストラクチャと呼ぶ。

対して、[archi.an]はひとつずつつかえひっかえで仮設するものとする。

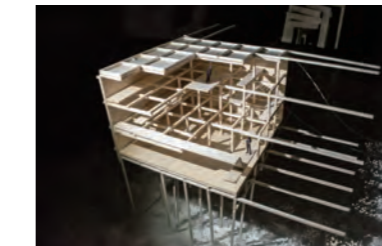
fig.4 常設のストラクチャと仮設の[archi.an]

structure & [archi.an]

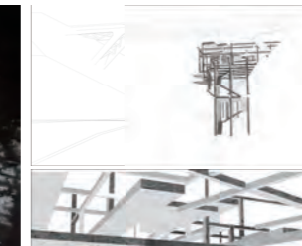
—6つの形態を歩く体験—



STRUCTURE



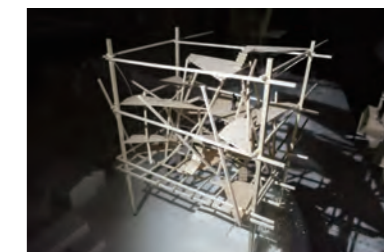
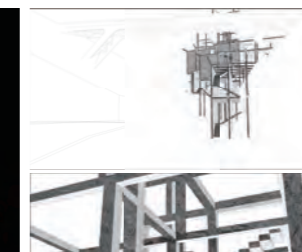
a1.



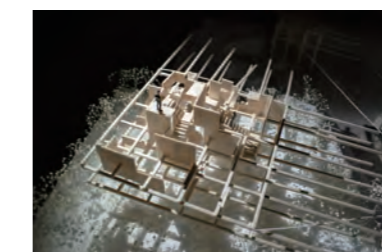
a2.



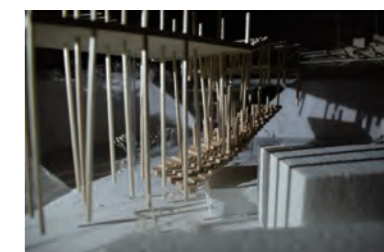
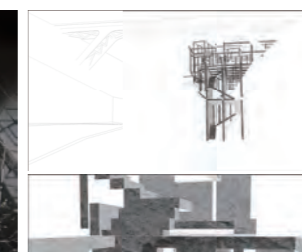
a3.



a4.



a5.



a6.

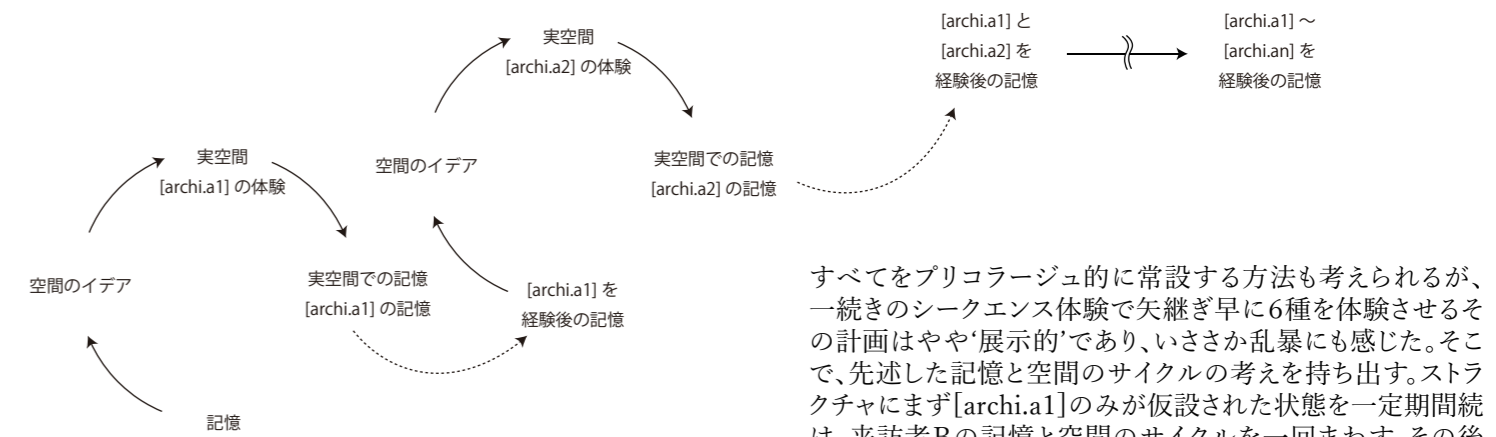


fig.5 Bのサイクルで見る記憶の蓄積

すべてをプリコラージュ的に常設する方法も考えられるが、一続きのシーケンス体験で矢継ぎ早に6種を体験させるその計画はやや'展示的'であり、いささか乱暴にも感じた。そこで、先述した記憶と空間のサイクルの考えを持ち出す。ストラクチャにまず[archi.a1]のみが仮設された状態を一定期間続け、来訪者Bの記憶と空間のサイクルを一回回す。その後[archi.a1]を外し[archi.a2]を仮設することで、Bのサイクルをまた一回回す。同様に繰り返すことで、Bの記憶の蓄積の中にやがてはAの見た空間のアイデアが含まれていく。